

明恵の思想「あるべきようは」

(1) 梅尾の高山寺

鎌倉初期の僧、明恵がこんな面白い詩を残している。！

「あかあかやあかあかあかやあかあかや

あかあかあかやあかあかや月」

明恵は承安三年（1173年）、紀州有田に生まれた。八歳のとき両親と死別し、その後、京都の神護寺に入門して修学に励んだ。のちに後鳥羽上皇から賜わった京都西北の梅尾（とがのお）の地に高山寺を創建し、また東大寺の学頭にもなった名僧である。！ 月をこよなく愛し、月を歌った歌が多いため「月の歌人」とも言われている。自撰の歌集『遺心和歌集』があり、これを中心に弟子高信が編んだ「明恵上人集」もある。この歌は一風変わった歌だが、月の明るさ、清らかさ、さらには、求道一途の彼が理想とする、人のあるべき姿を詩ったものという説が一般的である。！

ともあれ、この歌は理屈抜きで味わってほしいものである。京都は梅尾（とがのお）の高山寺(注1)、その石水院だからこそ、この歌が生まれたのだと思う。月の光を味わうのにあれ以上の「場所」があるとは思えない。庭に面した石水院の廊下。廊下に座禅しているとまぶたに月の光が入ってくる。座禅を終わってふと見上げると、空には月がこうこうと輝いている。高台であるために塀の向こうは東の山まで何もない。ただ月の光があるのみである。東の山は遠くもなく近くもない。その空間には月の光が満ちている。庭を前にしてあの広い縁側で座禅を組んでいると、仲秋の明月には特にこのような感覚になってくるのではないか。それが自然である。月の明るさを感じたままに歌う明恵の、飾らない人柄がよく現れていると思う。

「あかあかやあかあかあかやあかあかや！

あかあかあかやあかあかや月」

私は石水院の「月の光」を想像するだけですが、それを想像しながら、この際、「月の光」というテーマで、ネット検索してみました。残念ながら明恵の歌のイメージと合致する画像は見つかりませんでした。美しい画像がいくつか見つかりましたのでここに紹介させていただきます。！

<http://kuniomi.gr.jp/geki/iwai/tukihikari.pdf>

(2) 象徴天皇の源流

鎌倉時代という時代は、まさに古代から中世に代わる時代の節目であり、日本史上でもまれな変革期であった。文字どおり一所懸命に命を懸けて土地を守るといふ坂東武士が、奢侈柔和な古代貴族社会に決別し、質実剛健な中世武家社会を作りあげていくのである。

そして武家社会は地方分権社会の始まりでもある。政治体制も、御成敗式目（ごせいばいしきもく）が示すように、権力は完全に武士たちの手にゆだねられた。「君臨すれど統治せず」の言葉どおり、天皇は権威に生きることとなる。地方分権社会と権威に生きる天皇・・・ここが大事なところである。さて、この御成敗式目が提示した政治体制は、明治維新まで延々と続くのであるが、その源泉は明恵上人の哲学「あるべきようは」とそれを実践した北条泰時の政治によるものであった。！ 明恵上人の哲学「あるべきようは」とそれを実践した北条泰時の政治について、山本七平の『日本を動かす原理「日本的革命の哲学」』の解説を書いたことがある。以下において、まずその要旨を述べ、その後で全文を紹介することにしよう。!!! 御承知のように、保元（ほうげん）の乱は、大雑把に言えば、鳥羽法皇と崇徳（すとく）天皇との勢力争いであり、平家も源氏もそれぞれふた派に分れて戦った。平清盛は、鳥羽法皇の側についてのし上がるきっかけをつかんだ。そのあとの平治の乱は、藤原氏と源氏が結託して起こした反乱であり、平清盛はこれを討って、権力の座を手中にした。なお、源頼朝の挙兵は、源氏と平家の戦いであり、「乱」とは言わない。源頼朝が鎌倉幕府を開いたのちも後白河法皇と後鳥羽天皇の態勢はそのまま続いたのである。その後、後白河法皇はなくなり、後鳥羽天皇がそのあとを継いで後鳥羽法皇となりすべての実権を握った。その後鳥羽法皇を、武士の頭領でもない北条一族が処分したのである。！ これは大変なことで、天皇を敬う立場からは、北条一族はケシカランということになる筈である。そこをどう理解するかということがポイントであり、問題の核心部分である。！！ さて、山本七平は、以上のように、「皇国史観」の源流とされる水戸学において、義時・泰時のとった行動を是認しているさまを紹介しているのだが、やはり・・・後鳥羽・土御門・順徳の配流ほど驚愕すべき事件はわが国の歴史上他に例を見ない。宝字の変（皇太后孝謙が天皇淳仁を廃す）は、皇太后が天皇を幽した事件であるし、保元の乱は天皇である後白河が上皇（崇徳）を配流した事件である。

ところで、泰時は明恵の思想に大きな影響を受けたことはつとに知られている。明恵と泰時の邂逅は、余りに＜劇的＞で話がうまく出来すぎているので、これをフィクションとする人もいることはいる。しかし、明恵上人が何らかの形で幕府側から尋問されたことは、きわめてあり得る事件である。　　というのは、いずれの時代も無思想的短絡人間の把握の仕方は「二分法」しかない。現代ではそれが保守と革新、進歩と反動、タカとハト、右傾と左傾、戦争勢力と平和勢力という形になっているが、二分法的把握は承久の変の時代でも同じであった。まして戦闘となれば敵と味方に分けるしかない。その把握を戦闘後まで押し進めれば、朝廷側と幕府側という二分法しかなくなる。

そしてそういう把握の仕方をすれば明恵は明らかに朝廷側の人間であった。否、少なくともそう見られて当然の社会的地位と経歴をもっていた。その人間に不審な点があれば、三上皇を島流しにし、天皇を強制的に退位させた戦勝に驕る武士たちが、明恵を泰時の前に引きすえたとして不思議ではない。さらに彼に、叡山や南都の大寺のような、配慮すべき政治的・武力的背景がないことも、これを容易にしたであろう。　　ところがこの明恵に感動して泰時がその弟子となった。このことはフィクションではない。

さて、西欧型革命の祖型は、体制の外に絶対者（神）を置き、この絶対者との契約が更改されるという形ですべてを一新してしまう「申命記型革命」である。　　！　　この場合、それは、現実の利害関係を一切無視し、歴史を中断して別の秩序に切り替えるという形で行なわれるから、体制の中の何かに絶対性を置いたら行ない得ない。従って革命はイデオロギーを絶対化し、これのみを唯一の基準として社会を転回させるという形でしか行ない得ないわけである。

体制の内部に絶対性を置けば、それは、天皇を絶対としようと幕府を絶対としようと、新しい秩序の樹立は不可能である。　　！　　体制の内部に絶対性を置きながら新しい秩序を樹立することはできない。しかし、新しい秩序を確立しなければならない。古い秩序の継続と新しい秩序の創造、この矛盾をどう解決するか。

そこで明恵の思想・「あるべきようは」が光り輝いて来るのである。

明恵のユニークさというのは、国家の秩序の基本の捉え方にある。明恵は「人体内の秩序」のように、一種、自然的秩序と見ているのである。明恵に本当にこういう発想があったのであろうか。この記述は史料的には相当に問題があると思われるが、以上の発想は、明恵その人の発想と見てよいと思う。というのは、「島へのラブレター」がそれを例証しており、このラブレターの史料的价值は否定できないからである。

「その後、お褒りございませんか。お別れしまして後はよい便（べん）も得られないままに、ご挨拶（あいさつ）もいたさずにおります。いったい島そのものを考えますならば、これは欲界（よくかい）に繫属（けいぞく）する法であり、姿を顕（あらわ）し形を持つという二色（にしき）を具（そな）え、六根（ろっこん）の一つである眼根（げんこ

ん)、六識(ろくしき)の一つである眼識(がんしき)のゆかりがあり、八事俱生(ぐしゅう)の姿であります。五感によって認識されるとは智(ち)の働きでありますから悟らない事柄(ことがらが働くとは理すなわち平等であって、一方に片よるということはありません。理すなわち平等であることこそ実相ということ、実相とは宇宙の法理(ほうり)そのものであり、差別の無い理、平等の実体が衆生(しゅじょう)の世界というのと何らの相違はありません。それ故に木や石と同じように感情を持たないからといって一切(いっさい)の生物と区別して考えてはなりません。ましてや国土とは実は『華嚴経(けごんきょう)』に説(と)く仏の十身中最も大切な国土身に当っており、毘盧遮那仏(びるしゃなぶつ)のお体の一部であります。六相まったく一つとなって障(さわ)りなき法門を語りますならば、島そのものが国土身で、別相門からいえば衆生身(しゅじょうしん)・業報身(ごうほうしん)・声聞身(しょうもんしん)・菩薩身(ぼさつしん)・如来身(にょらいしん)・法身(ほつしん)・智身(ちしん)・虚空身(こくうしん)であります。島そのものが仏の十身の体(てい)でありますから、十身相互にめぐるが故に、融通無碍(ゆうずうむげ)で帝釈天(たいしゃくてん)にある宝網(ほうもう)一杯(いっぱい)となり、はかり得ないものがありまして、我々の知識の程度を越えております。それ故に『華嚴経』の十仏の悟りによって島の理(ことわり)ということを考えますならば、毘盧遮那如来(びるしゃなにょらい)といたしても、すなわち島そのものの外にどうして求められましょう。このように申しますだけでも涙がでて、昔お目にかかりました折からはずいぶんと年月も経過しておりますので、海辺で遊び、島と遊んだことを思い出しては忘れることもできず、ただただ恋い慕(した)っておりながらも、お目にかかる時がないままに過ぎて残念でございます」確かに、現代人は明恵の世界を共有することはむずかしい。しかし、明恵が真に「島を人格ある対象」と見ていたことはこれで明らかであろう。同様に日本国そのものも「国土身」という人格ある対象であるから、まずこれに「人格のある対象」として「医者(いしや)の如く」に対しなければならぬというのが、その政治哲学の基礎となっている。

これを政治哲学と考えた場合、それは「汎神論的思想に基づく自然的予定調和説」とでも名づくべき哲学であろう。というのは、国家を一人体のように見れば、健康ならそれは自然に調和が予定されており、何もする必要はないからである。前に私は、これを「幕府的政治思想の基本」としてハーバードのアブラハム・ザレツニック教授に説明したとき、「一種の自然法(ナチュラル・ロー)的思想」だと言ったところ、同教授は「法(ロー)であるまい、秩序(オーダー)であろう」と言われたが、確かに「自然的秩序(ナチュラル・オーダー)」への絶対的信頼が基本にある思想といわねばなるまい。これは非常に不思議な思想、「裏返し革命思想」ともいうべき思想である。

さて、流動的知性というのは、まあいふなれば、一つの考え方にとらわれなくて、無意識のうちにもいろんなことがらを勘案しながら、そのときどきのもっとも良い判断をくださることのできる知性であるといつていいかと思われるが、これはまさに明恵の発想方法・「あるべきようは」そのものではないかと思う。日本では、西洋に比べて、現在なお流動

的知性が濃厚に働いていると考えているが、「自然的秩序（ナチュラル・オーダー）」という根源に立ち「国の乱れて穏かならず治り難きは、何の侵す故ぞと、先づ根源を能く知り給ふべし」という明恵の発想方法に今こそ立ち戻らなければならない。

わが国は、古くは中国、近年は欧米から・・・やむなくいろんな法律をまねしてわが国の法律としてきた。諸外国の法律をまねしたものを「継受法」という。やむなく「継受法」を採用しなければならないのは、もちろん国としての力関係による。幕末・明治（黒船）にも、大化・大宝（白村江）にも、さまざまな外圧が否応なく法と体制の継受を強制したことも否定できない。簡単にいえば、相手と対抗するには相手と同じ水準に急速に国内を整備しなければならない、それは相手の法と体制を継受するのが最も手っとり早い方法だからである。大和朝廷は562年の任那（みまな）の滅亡以来、朝鮮半島で継続的な退勢と不振に悩まされつづけ、さらに隋・唐という大帝国の出現は脅威以外の何ものでもなかった。そしてその結末は、663年の白村江の決定的大敗であった。これらがさまざまに国内に作用するとともに、当時の大和朝廷はすでに、全国的政府としてこれを統治する経済的・政治的基盤を確立していたことも、大宝律令を断行し得た理由であろう。大陸の文化を「継受しようという意志」は歴史的にほぼ一貫して持ちつづけられて、701年やっとそれが大宝律令として公布されるのである。そのことが間違っていたのではない。そうではなくて、それが「名存実亡」となったとき、「自然的秩序（ナチュラル・オーダー）」という根源に立ち、どう逆転（裏返し）できるかである。

天皇は「名」であり武士は「実」である。律令は「名」であり式目は「実」である。「名」を捨てて「実」に従わなければならない。「名」より「実」をとるべきである。それが二元論の常識であろう。「名」より「実」をとるという逆転、裏返しといってもいいが、それが西欧型革命であろう。しかし、明恵の「裏返し革命」は違う。単なる逆転、裏返しではなくて、もういっぺん「否定の否定」をやるのである。「名」ではなくて「実」である。しかし、なおかつ、「実」でなくて「名」である。「名」であると同時に「実」である。「名」でもないし「実」でもない。

要は、流動的知性が重要なのである。

そのような明恵の教えを、実に生まじめに実行した最初の俗人が、泰時なのである。そしてそれは確かに、日本の進路を決定して重要な一分岐点であった。！もしこのとき、明恵上人でなく、別のだれかに泰時が心服し、「日本はあくまで天皇中心の律令国家として立てなおさねばならぬ」と信じてその通り実行したらどうなったであろう。また、「日本は中国を模範としてその通りにすべきである」という者がいて、泰時がそれを実行したらど

うなっていたであろう。日本は李朝下の韓国のような体制になっていたかもしれない。

完全に新しい成文法を制定する、これは鎌倉幕府にとってはじめての経験なら、日本人にとってもはじめての経験であった。

律令や明治憲法、また新憲法のような継受法は「ものまね法」であるから、極端に言えば「翻訳・翻案」すればよいわけで、何ら創造性も思考能力も必要とせず、厳密に言えば「完全に新しい」とはいえない。さらに継受法はその法の背後にどのような思想・宗教・伝統・社会構造があるかも問題にしないのである。われわれが新憲法の背後にある宗教思想を問題とせず「憲法絶対」といつているように、「律令」もまた、その法の背後にある中国思想を問題とせずこれを絶対化していた。これは継受法乃至は継受法的体制の宿命であろう。

思想・宗教・社会構造が違えば、輸入された制度は、その輸出元と全く違った形で機能してしまう。新憲法にもこれがあるが、律令にもこれがあった。！ 中国では「天」と「皇帝」の間が無媒介的につながっているのではなく、革命を媒介としてつながっている。絶対なのは最終的には天であって皇帝ではない。ところが日本ではこの二つが奇妙な形で連続している。それをそのままにして中国の影響を圧倒的に受けたということは、日本の歴史にある種の特異性を形成したであろう。その現われがまさに泰時である。！ いわば「天」が自然的秩序（ナチュラル・オーダー）の象徴ではなく、天皇を日本的自然的秩序の象徴にしてしまったのである。これは「棚あげ」よりも「天あげ」で、九重の雲の上において、一切の「人間的意志と人為的行為」を実質的に禁止してしまった。簡単に言えば「天意は自動的に人心に表われる」という孟子の考え方は「天皇の意志は自動的に人心に表われる」となるから、天皇個人は意志をもつてはならないことになる。これはまさに象徴天皇制であって、この泰時的伝統は今もつづいており、それが天皇制の重要な機能であることは、ヘブル大学の日本学者ベン・アミ・シロニイが『天皇陛下の経済学』の中でも指摘している。！ 明恵は、「阿留辺畿夜宇和（あるべきようは）」を座右の銘にしていたといわれている。「梅尾明恵上人遺訓」には、『人は阿留辺畿夜宇和（あるべきようは）の七文字を持（たも）つべきなり。僧は僧のあるべきよう、俗は俗のあるべきようなり。乃至（ないし）帝王は帝王のあるべきよう、臣下は臣下のあるべきようなり。このあるべきようを背（そむ）くゆえに一切悪しきなり。』・・・とあり、貞永式目の精神的バックボーンをなすものとも言われている。この意味するところは、たいへん深いものがあるようだ。

さあ、それでは、『日本を動かす原理「日本的革命の哲学」』の解説を紹介することしよう。

<http://www.kuniomi.gr.jp/geki/iwai/yamamoto.html>

私は、以前に、この山本七平の『日本を動かす原理「日本的革命の哲学」』を勉強した上で、「天皇のあり方」を論じたことがある。その際、つねに明恵の「あるべきようは」の思想を意識しながら、論考を進めていった。当然、明恵の「あるべきようは」は、「帝王は帝王のあるべき姿」を指し示している。それが「象徴天皇」としての天皇の姿である。したがって、現在の「象徴天皇」の源流に明恵の「あるべきようは」の思想がある。「天皇のあり方」については、私の以前に書いた次のホームページを是非ご覧いただきたい。

[!http://www.kuniomi.gr.jp/geki/ku/index.html](http://www.kuniomi.gr.jp/geki/ku/index.html)

(3) 河合隼雄の「明恵夢に生きる」

河合隼雄は、その著作「明恵夢に生きる」で『「あるべきようは」は、日本人好みの「あるがままに」というのでもなく、また「あるべきように」でもない。時により事により、その時その場において「あるべきようは何か」と問いかけ、その答えを生きようとする』ものであると述べている。何でも受け入れる母性的な「あるがままに」でもなく、肩肘張って物事を峻別しようとする父性的な「あるべきように」でもない。白と黒、善と悪、都市と田舎、大企業と中小企業……。どちらかに偏してはいけない。違いを認めながら共和する心が大事だという、古代から連綿と続いている歴史的な知恵と相通ずる思想である。

明恵は、承安三年（1173）に生まれ、貞永元年（1232）に60歳で没した、鎌倉時代初期の名僧である。彼の生きた時代は、平家から源氏へ、源氏から北条へとあわただしく権力の座が移り、その間にあって、法然、親鸞、道元、日蓮などが現われ、日本人の霊性が極まりなく活性化された時代であった。明恵はこれらの僧と共に名僧として崇められたが、他の僧のように「新しい」宗派を起こしたのでもなく、彼の教えを守る人たちが現代に至るまで大きい宗派を維持してきたというのでもない。しかし、**彼は世界の精神史においても稀有と言っていいほどの大きい遺産をわれわれに残してくれた。それは、彼の生涯にわたる膨大な夢の記録である。**

明恵は「夢に生きる」ことによって自己実現を図り、華嚴と真言の世界を統合した新しい世界、それは21世紀の哲学にも通じ得るまったく新しい世界であるが、そういった新

しい華嚴の世界の先達となった誠に希有な人であるが、河合隼雄によれば、そのすべてがそれら膨大な夢の記録によって解明できるのだそうだ。

わが国における華嚴宗の中興の祖・明恵については、次を参照されたい。

<http://www.kuniomi.gr.jp/geki/iwai/kegonkyou.pdf>

それでは、河合隼雄の名著「明恵夢に生きる」（1987年、講談社）を勉強することにしよう。

しかし、その前に、明恵の「あるべきようは」の思想の背景となっている「華嚴哲学」のことを少しお話ししておきたい。その上で、河合隼雄の「明恵夢に生きる」を勉強することにしよう。！自由と不自由、平等と不平等、善と悪、権利と義務、父性本能と母性本能、陽と陰・・・、世の中というものはひとつの価値観だけでやっていけない。禅の言葉に「両頭截断して、一剣天に依って凄まじ」という言葉があるが、これはそのことを言っているのであり、白とか黒とか・・・、そういう相対的な認識の仕方というものを戒めている。白でもあり黒でもあると同時に白でもないし黒でもない・・・そういう絶対的な認識に立つべきとの教えである。こういう絶対的な認識の仕方からいくと、白か黒かという区別ができないのであるが、近代科学は、もちろん、それが白か黒かを区別しないとまあいうなればやっていけないのではないか。そういう思考の延長線上にキリスト教などの一神教があるが、本来、存在というものはそういうものではないだろう。存在というものは、そういう白とか黒とかという相対的な認識を超越したものであり、白との関係黒との関係が問題なのである。

京都大学100周年記念の記念講演会が一昨年の秋に東京であり、河合隼雄さんが「日本人の心のゆくえ」と題して講演を行なわれた。近代科学は、普遍性を求めるものであり、したがってあらゆる存在の明確な区別、言い換えれば、関係性の截断が必要である。華嚴宗というものは、そういう近代科学の原理とは全く違うことをやったのであり、近代科学が否定した関係性を重視する。全関係の総和としての存在というものは、名前がつけられないから「無」と言わざるを得ないが、華嚴宗ではそれを「挙体性起（きょたいせいぎ）」という。生け花というものは、存在が挙体性起（きょたいせいぎ）するもっともいい形を求めるものであり、そういう意味で、「存在が花している」のである。こういう日本文化の存在論からすると、存在の現れとしてそこに花がある。すべてのものは存在から出てきた。私は、存在が岩井國臣しているのである。最後は、西洋文化と日本文化の共生の必要性を訴えられ、今後我々日本人は矛盾システムを生きていかなければならないと言われたのであるが、その思想的背景として、まあ、そういう日本文化の存在論、つまり挙

体性起（きょたいせいぎ）ということをいわれたと思う。しかし、私は長い間、拳体性起（きょたいせいぎ）ということがよく判らなかつた。どんな辞書を引いても出てこないのである。

ところが、武家社会源流の旅の行き着く先に明恵（みょうえ）がいるのではないかとの考えから、私は、河合隼雄さんの著書「明恵 夢を生きる」（京都松柏社）を勉強して・・・やっとな拳体性起（きょたいせいぎ）ということが判った。以下に河合隼雄さんの説明を紹介しておきたい。

華嚴思想の究極は、法界縁起にあると言われたりする。この法界という語は簡単には説明し切れないことのようにだが、一応「望月仏教大辞典」を見ると、いろいろな意味が書かれている。そのなかで「華嚴教学では」という項を示すと、「<現実のありのままの世界>と<それをそのようにあらしめているもの>との二つの相即的に表現する言葉として用いられる。云々・・・」となっている。（註；相即的という言葉もあまり使わない言葉であるので分りにくいと思うが、相は二つ以上のものの関係をいい、即はぴったりくっついている様を言うので、相即的とは、相対的な関係にあるいくつかのものを本来はひとつであると理解する・・・そのような理解の仕方をいう。）

法界はまず出発点として、<現実のありのままの世界>であるが、<それをそのようにあらしめているもの>は何かを考え出すことによって、その意味合いが変わってくるのである。それを華嚴思想では、事法界、理法界など四種の法界の体系に組織化している。

事法界はわれわれが普通に体験している<現実のありのままの世界>で、そこでは、それぞれの事物は明確に他と区別されて自立的に存在している。これは「華嚴的な言い方をすれば、事物は互いに礙（さまた）げ合うということ。AにはAの本性があり、BにはB独自の性格があつて、AとBとはそれによつてはつきり区別され、混同を許さない」という状態である。

ところが、このように事物を区別している境界線を取りはずして、この世界を見るとどうなるだろうか。『限りなく細分化されていた存在の差別相が、一挙に無差別性の茫茫たる無差別性の空間に転成する。この境位が真に覚知された時、禪ではそれを「無一物」とか「無」と呼ぶのであるが、華嚴の述語によると、このように見られた世界が「理法界」ということになる。・・・中略・・・。理法界の「空」は、「無」と「有」の微妙な両義性をはらんでいる。したがって、無限の存在可能性である「理」は、一種の力動的、形而上的想像力として、永遠に、不断に、至るところ、無数の現象的形態に自己分節

していく。・・・「空」（「理」）の、このような現れ方を、華嚴哲学の述語で「性起」と呼ぶのである。

華嚴哲学において、「性起」の意味を理解することは重要であるが、井筒俊彦によれば、一番大切な点は、それが挙体「性起」であるという。つまり、井筒によれば、「理」は、如何なる場合でも、常に必ず、その全体を挙げて「事」的に顕現する。だから、我々の経験世界にあるといわれる一切の事物、そのひとつ一つが、「理」をそっくりそのまま体現している・・・井筒はこのように言っている。

河合隼雄の説明はさらに続くが、ここではこの程度の紹介にとどめておきたい。再度申しておきたい。近代科学は、普遍性を求めるものであり、したがってあらゆる存在の明確な区別、言い換えれば、関係性の截断が必要である。華嚴宗というものは、そういう近代科学の原理とは全く違うことをやったのであり、近代科学が否定した関係性を重視する。全関係の総和としての存在というものは、名前がつけられないから「無」と言わざるを得ないが、華嚴宗ではそれを「挙体性起（きょたいせいぎ）」という。生け花というものは、存在が挙体性起（きょたいせいぎ）するもっともいい形を求めるものであり、そういう意味で、「存在が花している」[\(注2\)](#)のである。こういう日本文化の存在論からすると、存在の現れとしてそこに花がある。すべてのものは存在から出てきた。私は、存在が岩井國臣しているのである。

註：上記は、かつて私が書いた「挙体性起（きょたいせいぎ）」についての文章[\(注3\)](#)である。

さあ、それでは河合隼雄の「明恵夢に生きる」の勉強の始まり、始まり！！

<http://www.kuniomi.gr.jp/geki/iwai/yumemoku.html>

(4) 明恵と法然の宗教論争

明恵は、人間同士の争いや諍い（いさかい）を嫌い、山で座禅を組み、ただただ釈尊の教えを修学しようとしていた理想家だったようだ。明恵はほかの鎌倉時代の僧侶と違い、一宗を興したわけではないのに、なぜ多くの人たちが彼のもとを訪れ教えを乞うたか。特に女性の人気が高かったようだ。それもやはり自身を気取らないその人柄に引き寄せられてのことであつたらう。

明恵は亡き父母へを慕う気持ちが強く、仔犬を見ても、父母の生まれ変わりではないかと懐かしく思っていたらしい。鎌倉時代の代表的な彫刻家、運慶作の木彫の仔犬（高山寺蔵）をいつも机のそばに置き、こよなく愛したといわれている。明恵の生き方は極めて自然であつた。

彼はおそらく、自分の生き方について多分こう言ったであろう。

「私は後生で済むようとは思っていない。ただ、現世においてあるべきようにならうとするだけだ。修行すべきように修行し、振舞うべきように振舞えばいい。今は何をしてもかまわない、死後往生して助かればいい、などとはどの経典にも書いてない・・・」と。！ やはり法然とは根本的に考え方が違っていたようだ。法然の念仏思想は極楽往生を前提とした他力本願であり、明恵の「あるべきようは」は臨機応変の「自力本願」だ。きっとこれからのインターネット時代というものは即応性と融通性のある「自力本願」が求められよう。「あるべきようは」にこめられた明恵の思いが見直され、注目されるに違いない。

それでは、明恵の「あるべきようは」の思想が、どのように法然の考えと違うか、それを勉強するとしよう。しかし、それを始めるにあたって、少し述べておきたいことがある。その後で、明恵の「あるべきようは」の思想が、どのように法然の考えと違うか、それを勉強するとしよう

私は、拙著「劇場国家につぼん」において、最澄と徳一の宗教論争に触れ、『ここでは「唯識」への深入りはあえて避けるが、「違いを認める文化」に関連して、もっとも重要な点をもういちど述べておきたい。唯識では、人間はマナ識の違いによって生まれながらにして自ずと違いがあるし、教育環境などの違いによってアーラヤ識の薫習（くんじゅう）に差がつくので、後天的能力にも差がついてくると考えている。つまり、こういった人の違いというものを充分認識して修行方法を考えるべきだというのが法相宗の考えである。徳一と最澄の論争の勝敗は別として、こういった「人の違い」というものに焦点を当てた宗教論争が行なわれたというその歴史的意義は実に大きいと思う。そして、私は、徳一こそわが国の「歴史と伝統・文化」を受け継いでいると思うし、もし、わが国の

「歴史と伝統・文化」の心髄が「違いを認める文化」にあるのだとすれば、徳一に関する研究が各方面でもっと行なわれなければならないのではなかろうか。』・・・

と述べた。

また、ホームページ「桃源雲情」では、最澄と徳一の宗教論争について相当の時間をかけて勉強した。私の真骨頂であると言えるかもしれない。そのなかで、私は、『徳一の歴史的価値はいうまでもなく最澄との「三一論争」にあり、私は、法相宗「唯識論」と相まってこの論争の重要性がもっと叫ばれて良いのではないかと考えている。源信の評価によって「三一論争」の最終決着が図られたとされているが、そんなことはない。「唯識論」の21世紀的發展と相まって「三一論争」の再評価がなされて然るべきではないかと思うのである。イスラム教原理主義やキリスト教原理主義は判りが良いかも知れないが、「平和の原理」としてはダメである。最澄や法然もこれ又然り・・・である。違いというものは認められなければならない。私の考えでは、かかる観点から、「三一論争」自体極めて高い歴史的価値を有しており、徳一研究は、「三一論争」にその重点が置かれて当然だと思うのだが、高橋富雄が指摘するように、仏教哲学と古代信仰の結びつき・・・、これはとりもなおさず徳一の目指した宗教改革だが、私には、これも又、極めて高い歴史的価値を有しているのではないかと思えてならない。』・・・と述べた。

そして、さらに、『私は、キリスト教やイスラム教などと同じように原理主義と呼んでもいいかと思うのだが、阿弥陀仏に対する絶対的な信仰というものはえてして他の宗派を認めない、まあ言うなれば排他的な宗派とならざるを得ないのではないか。事実、法然は明恵と、三一権実論争を上回る激しい宗教論争をしている。原理主義は妥協を許さないのである。キリスト教もそうだし、イスラム教もそうです。日本人の感覚からすれば、いい加減だと言えばいい加減なのだが、まあ何でなければならないということはない。日本の神は「やよろずの神」・・・。原理原則にこだわらないのである。唯識というのは、人間そのものに違いがあるので、救いの方法もいろいろあるということ、理論的に明らかにしているのではないか。』・・・と述べておいた。！法然は明恵と、三一権実論争を上回る激しい宗教論争をしているのである。いよいよ法然と明恵の宗教論争を勉強するときがきた。いよいよである。袴田憲昭の「法然と明恵」（1998年7月、大蔵出版）を教科書としてこれからの勉強を進めて行きたい。ただし、あらかじめ言っておくが、彼と私とは、根本的に違う思想を持っているようであり、法然や明恵に対する評価はまったく逆なものとなっている。

さあ、それでは袴田憲昭の「法然と明恵」の勉強を始めよう。

(5) なぜ明恵なのか？

日本の仏教は、奈良仏教を原点として、その後、平安時代には天台宗と真言宗が勃興し、鎌倉時代には真宗、浄土真宗、禅宗、日蓮宗が勃興した。それらの新しい仏教は、当然、それを生み出した時代背景があり、それが生まれでてきた歴史的必然性があるのだが、奈良仏教がもはや時代の要請にあわなくなったということではない。

現在、世界は混沌の時代に入っている。世界は新しい秩序を求めて目まぐるしく変化している。新しい哲学が必要であり、新しい思想が必要である。そして、人びとの生活を律する宗教が必要になってきている。

私は、日本の「歴史と伝統・文化」の心髄は、「違いを認める文化」だと考えている。河合隼雄は、心髄がないのが・・・日本の「歴史と伝統・文化」の心髄だと言っていたが、私はそうは思わない。もちろん、これからの研究が必要であり、学者の先生方に期待するところが大きいであるが、もし私の言うとおりに、日本の「歴史と伝統・文化」の心髄が「違いを認める文化」だとしたら、これは大変なことで・・・、世界における・・・哲学や思想や宗教に大きな影響を与える可能性がある。学者の先生方に頑張ってもらいたい。しかし、素人ではあるが、私なりに勉強して、その勉強ぶりをこのホームページで世に問いたいと思うのである。皆さん方のご意見やら感想やら、おおいに叱咤激励をいただきたい。

日本の仏教は、奈良仏教を原点として、その後、平安時代には天台宗と真言宗が勃興し、鎌倉時代には真宗、浄土真宗、禅宗、日蓮宗が勃興した。そして、そのつど、奈良仏教と激しい宗教論争があった。ひとつは、最澄と徳一の宗教論争だし、もうひとつは、法然と明恵の宗教論争である。私は、日本の「歴史と伝統・文化」の心髄が「違いを認める文化」だという立場で、それぞれ徳一と明恵に軍配を挙げているのだが、今まで、徳一については、かなりの時間をかけて勉強してきた。徳一は、興福寺（法相宗）の代表である。しかし、奈良仏教を語るのに、東大寺（華嚴宗）を語らないで何を語るのか・・・。政治はもちろんのこと、仏教教義の面でも、歴史的に、明恵は絶対に欠かせない人である。

さて、私の家の墓は、京都の妙心寺（大心院）にある。平成17年3月20日に、春のお彼岸であり法事があった。その法事の後の食事が始まる間を利用して和尚さんが話をなさるのだが、今回は私にせよとのお話で・・・、30分ほど講話をさせていただいた。明恵についてである。

和尚さんは、若い頃、明恵に特別の関心をもって勉強された由。私の「劇場国家につぼん」・・・「わが国の姿（かたち）のあるべきようは」をご覧になって、私に講話をさせることを思いつかれたようだ。ありがたい話である。私は喜んでお引き受けしたのだが、その講話の骨子は次のとおりである。ここに紹介しておきたい。すなわち、

『 禅宗というのは、「座禅」によって「悟り」を得ようとする仏教の一宗派ですけれど、臨済宗の「栄西」に始まります。栄西によって日本の座禅が始まりました。そして、これはあまり知られていませんが・・・、栄西に教えを乞い・・・、見事な座禅を実践した人・・・それが「明恵」という人だと思います。後鳥羽上皇から特別の思（おぼ）し召しがあつて、梅尾の高山寺を開いた人・・・、それが明恵ですけれど、東大寺を代表する偉い坊さんでもあります。栄西は・・・明恵に臨済宗を引き継いでもらいたかったようですが、そういう事情があつて、実現しなかったようです。

ただし、明恵はお茶の栽培を栄西から引き継いで、それが・・・宇治茶に繋がっていきます。栄西と明恵の・・・まさに親子のような・・・親密な関係がなかったら、宇治茶というものは誕生していなかったかも知れません。

宇治茶の話はどうしても良いのですが、今私がいいたいことは、「座禅」というものの「すごさ」、「座禅」というものの「すばらしさ」であります。「座禅」によって人は「悟り」を得ることができるし、人格を高めることができるようであります。その達人が明恵であります。したがって、明恵の思想はすごいのです。哲学でいえば、今注目の「華嚴哲学」です。私は世界最高だと思っています。

さて、明恵がこんな面白い詩を残していおります。

「あかあかやあかあかあかやあかあかや あかあかあかやあかあかや月」

月をこよなく愛し、月を歌った歌が多いため「月の歌人」とも言われています。この歌にはいろいろと解説がありますが、私は、ともあれ、この歌は理屈抜きで味わってほしいものと考えています。

「あかあかやあかあかあかやあかあかや あかあかあかやあかあかや月」！

さて、皆様も御承知のように、今、世界は・・・ほとんどのものがアメリカの力によって動いています。しかし、アメリカの力の政策によって・・・、はたして、イラクに平和は訪れるのでしょうか。アメリカの力の政策によって・・・、はたして、テロはなくなり、世界に平和はやってくるのでしょうか。私は、アメリカが好きで、親米派ですが、アメリカの力の政策だけでは、21世紀・・・、世界はやっていけないと思います。自爆テロといますか、イスラム原理主義も困ったものですが・・・、アメリカのキリスト教原理主義も困ったものであります。自分の考えていることが一番正しいという・・・原理主義はいけません。相手のことも考えなければならないのです。人さまざまであり、違いというものを認めなければならないのではないのでしょうか。

明恵の思想「あるべきようは」というのがあります。やはりこれが一番いい・・・。臨済宗には、白隠禅師や山本玄峰などのものすごい人が出ていますが、歴史的に見て、私は、栄西直伝の「座禅」を組んだ明恵の思想・・・「あるべきようわ」が一番すごいように思われます。

親には親のあるべき姿があり、子供には子供としてのあるべき姿がある。男は男としての姿があり、女は女としての姿がある。イスラム教にはイスラム教としてのあるべき姿があり、キリスト教にはキリスト教としてのあるべき姿がある。人それぞれにあるべき姿があるのであり、相手のことをとやかくいうことよりも・・・やはり自分に厳しくした方が良い。

明恵はおそらく、自分の生き方について多分こう言ったであろうと思います。「私はあの世の天国で済むようとは思っていない。ただ、現世において、今、あるべきようにするだけだ。修行すべきように修行し、楽しむべきときは楽しめばいい。今は何をしてもかまわない、念仏を唱えて助かればいい、などとはどの経典にも書いてない・・・」と。

やはり法然とは根本的に考え方が違っていたようです。法然の念仏思想は極楽往生を前提とした他力本願であり、明恵の「あるべきようは」は臨機応変の「自力本願」であります。

きっと・・・これからのインターネット時代というものは・・・、臨機応変の「自力本願」というものが求められると思います。今後将来・・・、「あるべきようは」に込められた・・・明恵の思想が見直され、きっと世界から注目されるに違いないと思います。

「原点に帰る」という言葉がありますが、仏教は、やはりお釈迦さんの原点・「座禅」に帰って・・・、或いは仏さんの前に坐って、静かにじっくりと・・・、自分の「あるべきようは」をよくよく考えた方が良い。私はそのように考えるのですが、どんなものでしょうか。』・・・というものである。

(6) 明恵の一生

明恵は、紀伊国有田郡石垣荘吉原村の人。父は平重国、母は湯浅宗重の第四女。平重国は秩父氏の流れをくむが、もともと藤原氏である。また、母方の祖父湯浅宗重は、湯浅の豪族で藤原北家の藤原宗永の子とされる。

まず、湯浅町を中心として、明恵ゆかりの地理を説明しよう。次の地図をご覧ください。

http://www.mapion.co.jp/m/basic/34.056904238770414_135.19964386665794_6/t=simple/icon=home,139.75678139,35.69088278

地図には大きく湯浅町と書かれているが、湯浅町は、JRでいえば、和歌山駅から白浜方面に向かって、鈍行で12駅目でおおむね45分である。特急は湯浅町に止まる列車と止まらない列車があるが、止まる列車の場合は和歌山駅から4駅目でおおむね30分である。

湯浅町は、現在、人口は一万三千人ぐらいの小さな都市だが、歴史は古い。漁業・農業が盛んであるし、紀州藩の保護を受けて醸造業が発達した醤油は日本で有名だ。温暖な気候を利用して柑橘類の栽培も行われている。特に醤油としては、歴史ある「湯浅たまり」というたまり醤油が有名で、その醤油蔵のある街並みは湯浅の重要伝統的建造物群保存地区として選定されている。

なお、紀国屋文左衛門は湯浅出身である。それでは、湯浅町の観光のホームページを紹介しておこう。

http://www.yuasa-kankokyokai.com/yuasa_kankou.html

明恵が耳を切り必死の覚悟で修行を積んだ白上山地については、後ほど述べるが、上に示した地図では、西有田自然公園が登り口である。

明恵の生まれたところは、私が訪れたときは金屋町であったが、その後2006年1月の市町村合併に伴って有田川町になった。上の地図では、右端に歓喜寺と名所の印がついているが、その近くで生まれた。明恵ゆかりの寺で、重要文化財の仏像が二つもある。伝承によれば、寛和2年(986年)、『往生要集』の著者源信の開創とされている。源信は円仁の流れをくむ名僧であり、私にはなじみの人である。私は今まで源信についていろいろと書いているので、この際、明恵とも奥深いところで繋がっているということで、源信に関する私のホームページ [\(注4\)](#) を参照願いたい。

明恵は、8歳のときに母、ついで戦乱で父を失う。母方の叔父の神護寺上覚に師事する。上覚は、天台座主慈円(関白藤原忠通の子)が著した歴史書「愚管抄」五によると、1159年(平治元年)平治の乱がおきた時には、父宗重とともに平清盛に加勢したという。出家したのはその後と見られている。文覚上人 [\(注5\)](#) に師事し、文覚の神護寺復興に協力し、文覚の死後も神護寺の経営に力を尽くした。明恵は、文覚(もんがく)上人の孫弟子になるのである。

16歳のとき出家、東大寺戒壇院で受戒し、尊勝院弁曉・聖椿について華嚴(けごん)・抑舎(くしゃ)を受学、また密教を興然・実尊に、禅を栄西について学んだ [\(注6\)](#)。

21歳ころに神護寺 [\(注7\)](#) の別院梅尾(とがのお)山(十無尽院)に住し、東大寺尊勝院に赴いたが、寺僧間の争いをいとい、23歳のとき生誕地に近い白上(しらかみ)山地 [\(注8\)](#) にこもり、あるいはときに神護寺に帰住するなどして、《華嚴經》関係の仏典の研究をした。

明恵はかねてインド仏跡参拝を計画していたが、1203年(建仁3)春日明神の神託 [\(注9\)](#) により断念、05年(元久2)にも再度渡印の計画を実行に移そうとして《天竺里程書(印度行程記)》を作成したが、急病のため念願を果たせなかった。!06年(建永1)11月に後鳥羽院から梅尾の地を賜り、弟子義林房喜海などを伴って移り、《華嚴經》の〈日出先照高山嶺〉より高山寺と称することにした。まず金堂を造り、運慶・湛慶により釈尊や四天王像などが造られ、その後諸堂が整備された。金堂の裏山を楞伽(りようが)山と名付け、山中に花宮殿・羅婆坊と称する草庵を設け、巨石を定心石と名付けてときに寺中より逃れ、経疏を読み、坐禅入観の場とした。釈尊の遺跡になぞらえたもので、その旧跡が山中に現存している。

承久の乱のとき、公縁の妻女などをかくまい捕らえられたが、かえって北条泰時の帰依をうける機縁となった。また公縁の妻女は善妙寺にあって明恵について出家し、仏道修業の指導をうけ、高山寺尼經といわれる小冊子本の《華嚴經》(40巻本)が残っている。

釈尊を追慕し名利をいとした高潔な行状は多くの人々から尊崇された。その中には九条兼実・道家、西園寺公経、藤原定家や北条泰時、安達景盛らがあり、笠置寺の貞慶、松尾寺の慶政などとも親交があった。

法然の浄土教に反駁した《催邪輪(さいじやりん)》をはじめ、《華嚴唯心義》など《華嚴經》に関する著作が多く、《四座講式》はことに著名である。若いころからたびたび夢を受けて〈夢の記〉を伝え、また栄西より茶の実を得て、梶尾に茶を植えていわゆる〈梶尾茶〉を栽培した。

(7) 明恵のふるさと

明恵の母は、藤原氏の流れを汲む湯浅氏である。由緒正しき血統だが、それだけではない。歓喜寺がまあいってしまえば家みたいなもので、明恵は歓喜寺で産まれた。！ 歓喜寺は、[比叡山横川の恵心僧都\(源信げんしん\)](#)が熊野参詣のため紀伊に下向し、この地に九品の浄土を感得し、衆生済度の請願をたて、寛和二年(986年)に開基。浄土念仏の信仰が本郡に入った最初の道場である。かつては境内八丁四方にわたり、九品浄土を模し、上品堂、中品堂、下品堂、その他諸堂、善美を尽くしていたが、保元の頃、衰微してたのを明恵上人の寂後、地頭湯浅宗氏が「この地は上人の誕生地である。」とて、上人の遺弟、義林坊喜海を迎え中興し、歓喜寺と称した。湯浅家の庇護のもとに、受領松誉素川が再興し浄土宗となり、今日に及ぶ。

そのように、歓喜寺は、恵心(えしん)僧都(源信げんしん)とも深いつながりがある由緒正しき寺である。そういう環境に育った明恵の母は、きっと心優しい素晴らしい女性であつたに違いない。明恵は、「仏眼仏母」とでもいふべき・・そういう由緒正しき母の

胞衣に護られたまま、しかも繊細微妙な条件を保たれた環境の中に、静かにこの世に生まれでてきた。紀州は有田郡金屋町歓喜寺内・・・有田川の流れをま近に望む高台に明恵は産まれたのだが、そこには国指定の文化財となっている康永三年（1344）の銘文をもつ生誕地を示す卒塔婆（そとば）が現存しているほか、すぐ近くには明恵の胞衣塚があるのである。

私は先に、「胎児がなにかのベールに護られたまま、繊細微妙な条件を保たれた環境の中に、静かに立ち現れてくる様子を、そっくりそのままとらえようとしたのが「翁」である。」・・・

と中沢新一の言っていることを紹介した [\(注10\)](#) が、明恵は、有田川の畔・金屋の・・・まさに繊細微妙な環境の中で「仏眼仏母」の胞衣（えな）に護られて静かにこの世に生まれ出たのである。

胞衣信仰についてはすでに述べた。分娩から三十分以内に胞衣が排出される。庶民の一般的な風習としては、胞衣は屋敷の隅へ埋めるか、墓地の一隅にある胞衣墓に埋めることが多い。胞衣を埋めるのは夫の役目である。埋めたあとはよく踏まないと親のいうことを聞かない子になる、といわれる。また胞衣を埋めた上を最初に蛇が通ると蛇を、毛虫が通ると毛虫を嫌いになると、伝えられている。庶民の一般的な風習としてはそのようなものであろうが、特別な場合として、塚が作られたり、石碑が立ったりして、それが地域の信仰に繋がる場合がある。もっとも有名なものは、天照大神（あまてらすおおみかみ）の胞衣（えな）が山頂に埋められという例であろう。

その山を恵那山といい、麓に恵那神社がる。その地域を恵那という。恵那山は天照大神（あまてらすおおみかみ）の胞衣（えな）であるが、宇美八幡には「胞衣が浦」という地名が残っているし、上杉景勝（かげかつ）公の胞衣塚、光格天皇の胞衣塚、菅原道真（みちざね）の胞衣塚、牛若丸の胞衣塚など多くの胞衣塚がある。そのひとつが明恵の胞衣塚である。!!では、明恵の生誕地を」御案内するでしょう！

<http://www.kuniomi.gr.jp/geki/iwai/myouehuru.pdf> !

なお、明恵の思想「あるべきようは」を勉強する上での大事なキーワードは、上述の文章の中に出てきた注書きのものである。ここにまとめて示しておく。

注1：梶尾（とがのお）の高山寺

<http://www.kuniomi.gr.jp/togen/iwai/toganoo.html>

注2：「存在が花している」

<http://www.kuniomi.gr.jp/togen/iwai/mayame42.html>

注3：私が書いた「拳体性起（きょたいせいぎ）」についての文章

<http://www.kuniomi.gr.jp/togen/iwai/kyotaise.html>

注4：源信に関する私のホームページ

<http://www.kuniomi.gr.jp/togen/iwai/esin-in.html>

<http://www.kuniomi.gr.jp/togen/iwai/rosanji.html>

<http://www.kuniomi.gr.jp/togen/iwai/yokawa.html>

<http://www.kuniomi.gr.jp/togen/iwai/esin-in2.html>

<http://www.kuniomi.gr.jp/togen/iwai/ujitopo.html>

<http://www.kuniomi.gr.jp/geki/iwai/2hongen.html>

<http://www.kuniomi.gr.jp/togen/iwai/umegenji.html>

注5：文覚上人

<http://ja.wikipedia.org/wiki/%E6%96%87%E8%A6%9A>

注6：禪を榮西について学んだ

<http://blog.goo.ne.jp/tenjin95/e/9dcf53979d0f26208a303d792fcaef4b>

注7：神護寺

<http://www.jingoji.or.jp/>

注8：白上(しらかみ)山地

<http://www.kuniomi.gr.jp/geki/iwai/sirakami.html>

注9：春日明神の神託

<http://www.kuniomi.gr.jp/geki/iwai/kasumyou.html>

注10：中沢新一の言っていることを紹介した

<http://www.kuniomi.gr.jp/geki/iwai/iyomyoue.html>